



©Ellie Kurtz

サドラーズ・ウェルズ劇場 & カンパニー・オブ・エルダース Sadler's Wells Theatre & Company of Elders

最先端のコンテンポラリー・ダンスから、バレエ、タンゴ、ヒップホップまで多様なダンス・プログラムを誇るダンス専門劇場。作品の委嘱製作に力を入れ、プロデュース作品は世界の主要劇場で上演されている。専門劇場ならではの高い芸術性と世界有数のリソースを基盤に、コミュニティに向けた活動では多くの市民に創造的な刺激と学びの場を提供している。シニアを対象としたプログラムには、60歳以上の男女が参加するダンス・カンパニー「カンパニー・オブ・エルダース」、30年間続くアート・クラブ、2年に一度開催するシニア・ダンサーのためのダンス・フェスティバル「エリクシール」等がある。



©Nick Guttridge

ジョス・ジャイルズ Joce Giles (ラーニング&エンゲージメント部門 ディレクター)

2016年10月、現職に就任。これまで、ランベール(ランベール・ダンス・カンパニー、2013年から名称変更)にてクリエイティブ・プロジェクトのディレクターを務め、その傍ら、同カンパニーの教育・参加型プログラム及びアーティスト育成について知見を得る。ダンス教育の分野でのキャリアを開始する以前は、ダンサーとしてベター・シャワフス・バレエ、スコティッシュ・バレエ等で活躍。



©Dale Wightman

シモーナ・スコット Simona Scotto (カンパニー・オブ・エルダース リハーサル・ディレクター)

高齢の人々を対象としたダンスの指導者として、15年以上の実績をもつ。「カンパニー・オブ・エルダース」のリハーサル・ディレクターとして、マッシュ・ボーン、ホフェッシュ・シェクター、ウェイン・マクレガー等の作品に携わる。またカンパニーの委嘱による自身の振付作品は、英国内外の劇場で上演された。ロンドンを中心に、複数の高齢者ダンス・グループを指導、作品を提供している。ロンドン・コンテンポラリー・ダンス・スクール等でマスタークラスも行う。



©Roswitha Chesher

エンテレキー・アーツ & オールバニー劇場 Entelechy Arts & The Albany

エンテレキー・アーツはロンドン南東の地域社会に深く根付いた参加型アート・プロジェクトを展開する芸術団体。長期的な病気や複雑な障害を抱える若者、複合的な障害を抱える成人、学習障害や高齢化にともなう障害のある高齢者など、社会から孤立しにくい人々をつなぐ独自の手法は、英国内で高く評価されている。近年はデプトフォード地区にあるコミュニティ・シアター オールバニー劇場とのパートナーシップにより、孤立した虚弱な高齢者のニーズに焦点をあてた「ミート・ミー・アット・ザ・オールバニー」、「21世紀のティーン・ダンス」等を同劇場において展開している。



デービッド・スレイター David Slater (エンテレキー・アーツ 芸術監督)

「想像する力」によって平等で結束した地域社会を実現することを目指し、社会から孤立した高齢者、長期的な健康問題や複合的な障害を抱える人びとに向けた活動を行っている。高齢者の希望、不安、欲求に声を与える芸術性の高い活動を目指し、現在は、孤立して暮らす高齢者とアーティスト、プロデューサー、行政、医療とを創造的に結びつけ、協働を促す連携作りを中心に取り組んでいる。



ギャビン・バーロウ Gavin Barlow (オールバニー劇場 芸術監督)

就任以来14年間、同劇場がロンドンの重要な芸術拠点として躍進し、ソーシャル・エンタープライズへと変革を遂げるなかで、先導的役割を果たす。英国全土の90を超えるアートセンターのネットワーク「フューチャー・アーツ・センターズ」を設立、共同代表を担う。これまでに、コンタクト・マンチェスター、アクターズ・ツアリング・カンパニー、クイーン・アップ・ノース・フェスティバルにてエグゼクティブ・ディレクター等を務める。



©宮川舞子

さいたまゴールド・シアター & 1万人のゴールド・シアター2016

蜷川幸雄によって創設された高齢者演劇集団さいたまゴールド・シアターは、「年齢を重ねた人々が、個人史をベースに、身体表現という手法によって新しい自分に出会う場を提供する」という蜷川の発案をもとに、2006年4月、1,200名を超える応募者のなかからオーディションで選ばれた48名で発足。第一線で活躍する劇作家の新作を意欲的に上演してきた。これまで4度の中間発表、6回の本公演を実施。パリ、香港等にも招聘された。現在は66歳から91歳までの37名(男性12名・女性25名)が所属、平均年齢78歳。16年には「より多くの高齢者に輝く場を」との蜷川の企画・原案により「1万人のゴールド・シアター2016」を開催、ノゾエ征爾が脚本・演出を務めた。60歳以上の約1,600名が参加した大群集劇は大きな反響を呼んだ。



©宮川舞子

ノゾエ征爾 Seiji Nozoe (脚本家・演出家・俳優)

1995年、青山学院大学在学中に演劇を始める。松尾スズキのゼミを経て、99年に「はえぎわ」を始動。以降、全作品の作・演出を手がける。映画やTVドラマへ俳優として出演するほか、外部公演にも脚本家、演出家、俳優として多数参加。2010年より世田谷区内の高齢者施設での巡回公演(世田谷パブリックシアター@ホーム公演)や、広島や静岡など地方での長期滞在創作など、幅広く活動。12年、はえぎわ公演『〇〇トアル風景』にて、第56回岸田國士戯曲賞受賞。近年の演出作品に『ご臨終』『気づかいルーシー』『ボクの穴、彼の穴。』など。「1万人のゴールド・シアター2016」では脚本・演出を手がけた。



太下義之 Yoshiyuki Oshita (三菱UFJリサーチ&コンサルティング 芸術・文化政策センター長/主席研究員)

専門は文化政策。博士(芸術学)。独立行政法人国立美術館理事、公益社団法人日展理事、公益財団法人静岡県舞台芸術センター評議員、公益社団法人企業メセナ協議会監事。文化経済学会(日本)監事、文化政策学会理事、政策分析ネットワーク共同副代表。観光庁「世界に誇れる広域観光周遊ルート検討委員会」委員。東京芸術文化評議会委員、大阪府・2025年万博基本構想検討会議委員、オリンピック・パラリンピック文化プログラム静岡県推進委員会委員、沖縄文化活性化・創造発信支援事業アドバイザーボード委員長(〜2017.3)。京都市「東アジア文化都市2017実行委員会」委員、鶴岡市食文化創造都市アドバイザー。